

# 「ファウスト」 段階への理念的展開

——グレートヒェン悲劇からヘレナ体験へ——

藤 本 正 幸

Goethes Faust Ideelle Entwicklung zur Stufe

—— von der Gretchentragödie bis zum Helena-Erlebnis ——

Masayuki FUJIMOTO

Wie verhält sich überhaupt der zweite Teil des „Faust“ zum ersten? Wir müssen erst die vielen Jahrzehnte seines Schaffens voraussetzen. In Faust sind lang erwogene Motive plötzlich preisgegeben und neue in letzter Stunde eingefügt. Viele Partien des „Faust“ sind durchaus nicht eindeutig und verschiedene Konzeptionen sind sich schichtenweis ineinandergeschoben. Also ist alles im Geist des ersten Teils nicht zu Ende geführt. Dennoch können wir beobachten, daß Faust aus dem „Halbdunkel eines befangenen Individuum über in eine höhere, breitere, hellere, leidenschaftlosere Welt“ tritt. Es zeigt sich schon mit der ersten Szene in Faust II, daß die ideelle Entwicklung seines weiteren Weges wesentlicher wird als die dramatische Verkettung. Durch die Berührung mit der mütterlichen Erde erwacht Faust zu neuem Leben. Indem er die Kräfte der Natur spürt, findet er den Sinn nicht mehr im Augenblick, sondern im Weg zu einem noch ungewissen Ziel. Im zweiten Teil erlebt er die Schönheit nicht als momentanen Effekt, sondern im großen Zusammenhang der ganzen Natur genetisch begreift. Er bemüht sich um ein genetisches Erfassen des schönen Menschen. Helena, das Symbol der Schönheit, bringt ihm die Fülle und den Sinn des Lebens. 1831 schrieb Goethe: „In Faust selber eine immer höhere und reinere Tätigkeit bis ans Ende, und von oben die ihm zu Hilfe kommende ewige Liebe“. Wir dürfen die Gretchentragödie und das Helena-Erlebnis als Kapitel von Goethes Leben, als Deutung seines Wegs von „Sturm und Drang“ nach seiner Stiftung einer deutschen Klassik erkennen.

「ファウスト」第一部の中心をなすグレートヒェン悲劇に対し、第二部 第三幕のヘレナ劇は「ヘレナ 古典主義的・ロマン主義的夢幻劇 ファウスト幕間劇」と題し、1927年に独立した形式で発表されたもので、時はトロイの滅亡からミソルンギの陥落までまる三千年を包み込んでいる。第一部と第二部の関連は、ゲーテ自身、第一部は主観的、情熱的な世界を、第二部はより高い世界を描いている<sup>1)</sup>。神とメフィストとの対話、ファウストとメフィストとの契約は、引き続き効力を持つが、第二部は各々の場が断片的に仕上げられたた

め、全体的な一貫性はない。しかし、ファウストの魂の、そして、その背後にあるゲーテの世界の理念的進展はうかがうことができるのである。

## 1

「グレートヒェン悲劇」は、第一部における主要部分をしめている。この作品の背景には1771年のフランクフルトでの嬰兒殺しの裁判、フリーデリーケ体験、ヴェルツェルにおけるヴェルター体験が含まれている。若きゲーテの時代である。時は「シュトルム・ウント・ドラング」。ファウストは、宇宙の全体と統一を認識したいと欲する人間である。

Vom Himmel fordert er die schönsten Sterne  
Und von der Erde jede höchste Lust,  
Und alle Näh' und alle Ferne  
Befriedigt nicht die tiefbewegte Brust.

彼は天上のいちばん美しい星を取ろうとしているかと思うと、／大地のもっとも深い楽しみをも極めたいと考えています。／近いものも遠いものも／彼の波立つ胸の底を満足させないのです。(303～307)

「天上の序曲」において、メフィストが見抜き神に告げたファウストの心の奥底である。しかし、ファウスト自身、このことは、はっきりと自覚しているのである。啓蒙主義的な助手ワグナーに次のように述べている。

FAUST. Du bist dir nur des einen Triebs bewußt;  
O lerne nie den andern kennen!  
Zwei Seelen wohnen, ach! in meiner Brust,  
Die eine will sich von der andern trennen;  
Die eine hält, in derber Liebeslust,  
Sich an die Welt mit klammernden Organen;  
Die andre hebt gewaltsam sich vom Dust  
Zu den Gefilden hoher Ahnen.

お前は人生のただ一つの欲望しか知らない。／もう一つの欲望は、一生涯知らずにすませたいものだ。／おれのなかには、ああ、二つの魂が住んでいる。／それが互いに、別々にわかれようと争っている。／一つは激しい情熱をもやし、／からみつく器官で、しっかりと下界にしがみつく。／もう一つは、是が非でも塵や埃の世を逃れて、／昔の聖賢たちの高い神霊の世界へ登ろうとする。(1110～1117)

ファウストの心の奥底には、地上における欲望と天上における霊的なものをめざす魂が激しく渦まいている。グレートヒェンの悲劇が始まるのである。

「街路」にて、ファウストは教会から出てきた一人の純心な少女グレートヒェンを見そめ恋におちる。メフィストの目的はあくまでファウストに生の享樂を与えることである。自分の道に誘惑することによって、神との賭に勝利するのである。ファウストの一方の魂、地上における欲望とメフィストのたくらみが一致する。悲劇は進行する。彼女はあやまって母親を、兄を死にいたらしめ、自らも私生児殺しの重罪人とし牢獄に投ぜられるのである。地上における欲望は満たされず、結局ファウストを満足させることはない。ファウストはメフィストに引きずられ立ち去る。

この悲劇には人間のどうしようもない非合理的な本性が、ファウストを盲目的に駆りたてている。グレートヒェンの純心さに心を打たれ、自らを恥じて心からの愛情を抱いたファウストの言葉である。

Laß diesen Händedruck dir sagen,  
Was unaussprechlich ist:  
Sich hinzugeben ganz und eine Wonne  
Zu fühlen, die ewig sein muß!  
Ewig! — Ihr Ende würde Verzweiflung sein.  
Nein, Kein Ende! Kein Ende!

この握りしめる手にいわせてくれ。／口ではいいあらわすことのできぬ心の深い思いを。／身も心もぼくはすっかりおまえに捧げる。／ぼくは永遠の歓喜を胸いっぱいを感じる。／永遠だ。永遠でなければならぬ。この歓喜が消える時は絶望の時だ。／いや、消えるものか。決して消える時はない。(3192～3196)

しかし、この陶酔の瞬間もたちどころに過ぎ去る。「森と洞」の場において、ファウストはグレートヒェンとの愛の終りを予感している。そして、それとともにメフィストとの悪のきずなを絶ちたがっているのである。

O daß dem Menschen nichts Vollkommnes wird,  
Empfind' ich nun. Du gabst zu dieser Wonne,  
Die mich den Göttern nah und näher bringt,  
Mir den Gefährten, den ich schon nicht mehr  
Entbehren kann, wenn er gleich, kalt und frech,  
Mich vor mir selbst erniedrigt, und zu Nichts,  
Mit einem Worthauch, deine Gaben wandelt.

しかし、人間には、何ひとつ全きものが与えられぬことを／おれはいま切実に感じている。一步一步／おれを神々に近づけるこの歓喜とともに、／お前は厄介な一人の道づれをおれに与えたのだ。／そいつが、冷酷に、不遜に、このおれを、我ながらあさましい卑しい人間にしよう。／お前の貴重な贈りものを、そいつは吹きかけた言葉の無気味な一息で、こなごなにふき散らしてしまう。(3240～3246)

この「森と洞」の場は、1775年には書かれていた初稿をイタリア旅行に持参し、新たに書き加えられたものである。ゲーテのイタリア旅行は1786年から始まり、古典主義理論確立の契機となった。

「森と洞」の最初の場面である。

FAUST allein. Erhabner Geist, du gabst mir, gabst mir alles,  
Warum ich bat. Du hast mir nicht umsonst  
Dein Angesicht im Feuer zugewendet.  
Gabst mir die herrliche Natur zum Königreich,  
Kraft, sie zu fühlen, zu genießen. Nicht  
Kalt staunenden Besuch erlaubst du nur,  
Vergönnest mir, in ihre tiefe Brust,  
Wie in den Busen eines Freunds, zu schauen.

崇高な大地の霊よ、おまえはおれが求めるものを／惜しみなく与えてくれた。お前が燃える  
焰の中に、／おまえの顔をあらわしてみせたのも、決して無駄ではなかった。／美しい自然  
をおれの王国として与え、自然を感じ／自然を享受する力をおれに附与したのは、お前だ。  
／そして、ただ冷たく自然に触れるだけでなく、／親しい友だちの心の中を見るように、自  
然の隠れたふところへ、／おれが入ることを許してくれた。(3217～3224)

この場には、古典主義期におけるゲーテの自然観がうかがえる。彼はイタリアにおいて自然  
の様々な現象や、自然に対する人間の錯綜を初めて理解することになった。シュトルム・ウン  
ト・ドラングの時代は克服されようとしている。シュトルム・ウント・ドラングの時代は「天  
才時代」と呼ばれた若々しい文学革命の時代である。燃えあがるような瞬間を、何ものにもと  
らわれることなく主観的に歌いあげた。しかし、この「森と洞」の場においては、明らかな進  
展が見られる。「人間には、何ひとつ全きものが与えられぬ」ことを自然から知るのである。  
この「森と洞」の場は前述したように、後に書き加えられたため、全体の筋の流れからは離れ  
たものとなっている。しかし、ファウストには「二つの魂」がある。認識への意欲は衰えるこ  
とはない。グレートヒェンとの愛による停滞は許されない。「聖賢たちの高い神霊の世界へ」  
(1117) の道を進まねばならない。

## 2

ゲーテは「詩と真実」の中で、自らの作品「エゲモント」の主人公の行動原理について「デ  
モーニッシュ」という言葉を用いている。そして、彼自身もこの「悟性や理性では解き明かし  
えないもの」に支配されているというのである。「詩と真実」における「デモーニッシュ」な  
ものの記述<sup>3)</sup>は次の通りである。

Er glaubte in der Natur, der belebten und unbelebten, der beseelten und unbeseelten, etwas  
zu entdecken, das sich nur in Widersprüchen manifestierte und deshalb unter keinen Begriff,  
noch viel weniger unter ein Wort gefaßt werden könnte. Es war nicht göttlich, denn es  
schien unvernünftig, nicht menschlich, denn es hatte keinen Verstand, nicht teuflisch, denn es  
war wohlthätig, nicht englisch, denn es ließ oft Schadenfreude merken. Es glich dem Zufall,  
denn es bewies keine Folge, es ähnelte der Vorsehung, denn es deutete auf Zusammenhang.  
Alles, was uns begrenzt, schien für dasselbe durchdringbar, es schien mit den notwendigen  
Elementen unsres Daseins willkürlich zu schalten, es zog die Zeit zusammen und dehnte den

## Raum aus.

彼は自然のうちに、生命のあるなきに、また、魂のあるなきものにかかわらず、矛盾の中のみ現われ、いかなる概念によっても、ましてや、いかなる言葉によって捕捉できないものを見い出されと思った。それは神的なものではなかった。なぜなら、それは非合理的なものに思えたからである。それは人間的なものでもなかった。それは悟性を持たなかったからである。それは悪魔的でもなかった。それは慈悲的であったからである。それは天使的でもなかった。それはしばしば悪意の喜びを気づかせたからである。それは偶然に似ていた。それは何ら関係をも示していなかったからである。それは神の摂理に似ていた。それは因果関係を暗示していたからである。我々を制限するすべてを、それは貫き透すことができるように思えた。それは我々の存在の必然的諸要素を思うままにあやつるように思えた。それは時間を収縮し、空間を拡大した。

第一部 グレートヒェンとの愛の破局は、メフィストのたくらみによるのでもなく、単なる運命の帰結でもない。ファウストの心のデモーニッシュな力に基づいている。

有限なる人間の心の奥底にある無限なる力、デモーニッシュ、これがグレートヒェンの悲劇をうみ出している。この力は、いっさいの外的な法則、いっさいの理性的な制限、いっさいの才智、いっさいの愛、そしてファウストの道徳的良心をも打ち砕くことになる。この悲劇は外面的には、グレートヒェンの悲劇であるが、同時にファウスト自身の悲劇でもある。もしこのデモーニッシュなものがファウストの内面に存在していなかったならば、この結末も違った局面をむかえることになったであろう。

Nur im Unmöglichen schien es sich zu gefallen und das Mögliche mit Verachtung von sich zu stoßen. Dieses Wesen, das zwischen alle übrigen hineinzutreten, sie zu sondern, sie zu verbinden schien, nannte ich dämonisch, nach dem Beispiel der Alten und derer, die etwas Ähnliches gewahrt hatten. Ich suchte mich vor diesem furchtbaren Wesen zu retten, indem ich mich, nach meiner Gewohnheit, hinter ein Bild flüchtete.

それは不可能なもののみを喜び、可能なものは嫌悪の念をもって自分から遠ざけるように思えた。他のあらゆるものの中に入り込み、それを分離し、それを結合するように思えるこの存在を、私は、古人の例にならって、また、私のそれと似たようなことを認めた人たちの例にならって、デモーニッシュと名づけた。私は、私の従来やり方に従い、形象の背後に逃れるこ

とによって、この恐ろしい存在から自分を救い出そうと努めた<sup>4)</sup>。

デモーニッシュな、即ち、非合理的な力に身をゆだねることの危険性をゲーテは認識している。それ故、青年期の作品は、それが必然的にひきおこそうとする身の破滅から我身を救済するための作品でもある。

反面、このデモーニッシュな人間は脅威的な運命に対しても、無限の行動力を発揮するのである。ゲーテはこのようなデモーニッシュな人間の例として、ナポレオンの名を挙げ、また、文学の分野においても、ウォルター・スコット、バイロンの名を挙げ、その作品は思いもよらぬ影響を与え、そこではいっさいの悟性も、理性も役に立たないものになっている。と述べている<sup>5)</sup>。

### 3

1831年2月17日、「ファウス 第二部」の、原稿の進み具合を尋ねるエッカーマンに、ゲーテは次のように答えた。「第一部」は極めて主観的である。すべてのことが、より内攻的で、より情熱的な個性に由来している。——それにひきかえ第二部にはほとんど主観的なものはない。そこにあらわれる世界は、より高次な、より広大な、より明るい、より冷静な世界である<sup>6)</sup>。

第二部 ファウストは、花咲く草原に横たわり、不安の中で絶えず身を動かし、眠りを求めている。ここでは、第一部グレートヒェン悲劇に対する裁きも行われなければ、またファウストが裁きに値するか否かも問われない。アリエルの率いる妖精たちは、彼の心の傷跡をいやし、非難の鋭い矢を抜きとり、レーテ川の水で湯浴をさせるのである。

Schon verloschen sind die Stunden,  
Hingeschwunden Schmerz und Glück;  
Fühl es vor! Du wirst gesunden;  
Traue neuem Tagesblick!  
Täler grünen, Hügel schwellen,  
Buschen sich zu Schattenruh,  
Und in schwanken Silberwellen  
Wogt die Saat der Ernte zu.

音もなく時はうつり、／なやみも幸も消え失せてしまいます。／予感しませんか、あなたはすこやかに身も心も癒えるのです。／そして、ふたたび新しい朝の心を迎えましょう。／谷はみどり色によみがえり、岡は小高くもりあがって／木立ちの中に憩いの日かげをつくり、／打ちよせる海の波のように／<sup>とろいれ</sup>収穫を待つ麦の畑がいっせいに穂をなびかせます。(4650～4657)

コーラスの歌声に目ざめたファウストには生がよみがえる。

FAUST. Des Lebens Pulse schlagen frisch lebendig,  
Ätherische Dämmerung milde zu begrüßen;  
Du, Erde, warst auch diese Nacht beständig  
Und atmest neu erquickt zu meinen Füßen,  
Beginnest schon, mit Lust mich zu umgeben,  
Du regst und rührst ein kräftiges Beschließen,  
Zum höchsten Dasein immerfort zu streben. —

生命の脈博がよみがえったようにいきいきと打ちはじめ、／やさしく大気の仄あかりに挨拶をおくる。／大地よ、おまえは昨夜もふだんと変わらぬ堅固な存在をつづけた。／そして今朝は、新しく元気に満ちあふれておれの足下に息づき、／ふたたび歓喜をもっておれのまわりをつつもうとする。／おまえは最高の存在を目ざしてたゆみなく努力をつづける、／人間の力づよい決意を鼓舞し促すのだ。—— (4679～4685)

「浄らかな人にせよ、悪しき人にせよ、妖精達は世の中の不幸をあわれむ」(4619～4620) とアリエルは述べている。グレートヒェン悲劇の結末からみるとファウストの地獄墜ちはよほどのことがないかぎり考えられない。しかし、ゲーテは敢えてしない。悔悟の情と贖罪を問題とするよりも、ファウストをより高次の段階へ引き上げることを、即ちドラマ的な展開よりも理念的展開を重要とみなしている。シュタイガーによると<sup>7)</sup>、ゲーテはこの状況を打開するために、そして、ファウストを解放するために、眠りのモチーフを用いている。これは、「タウリスのイフィゲーニア」や「エグモント」においても用いられたものである。母親殺しの罪に苛まれ、呪いの重荷を負ったオレストが、眠りから目を醒ました時、もはや「復讐の念は、太陽の光といっしょに、消えてしまった」かのように彼には思えるのである。エグモントにおける眠りは、「厳しい思考の結び目を解きはなち、歓喜と苦痛の幻影をまぜ合わせる」役目を果たしてい



る。人間の苦痛や恐怖、不安な感情も眠りの中で忘却の恵みを与えられるという意見である。この部分をゲーテは、「対話」第四部のための草稿において<sup>8)</sup>、——この主人公を完全に無力化し、もはや破滅したものと見なし、そのような見せかけの仮死状態からまた一つの新しい生を燃えたたせるよりほか救いようがなかった。その場合、慈悲ぶかい、力のある霊たちに助けを求めねばならなかった。一切が同情であり、もっとも深い慈悲なのだ。彼がそのような救いに値いしたか否かについて、いかなる裁きも行われぬ。彼らにとって、彼が聖人であるか、それとも墮落という罪を背負った悪人であるかは問題ではなく「<sup>きよ</sup>浄らかな人にせよ、悪しき人にせよ、妖精たちは世の中の不幸をあわれむ。」のである。彼らはその和解的な流儀で鎮静作用をつづけ、強力な深い眠りによって、彼ファウストに、体験してきた過去の恐怖を忘れさせるのである。つまり「レーテの川の水で<sup>ゆあ</sup>浴みをさせるがいい」(4629)と述べたのだ。

## 4

ファウストに新しい生が目覚める。舞台は「花びらがあたかな春の雨のように生きとし生けるものの上に紛々と降りそそぐ」(4613～4614) 花咲く草原である。この冒頭の背景は第二部におけるファウストの活動を暗示している。第一部冒頭にみられたように、「夜、高い円天井の狭いゴシック風の部屋」で不安な時を過ごすファウストの姿はない。妖精達が飛びまわる草原で、アリエルは「いま新しい日が生まれるのだ」(4668)と告げる。自然がファウストに新しい生命を与えるのである。

In Dämmerchein liegt schon die Welt erschlossen,  
Der Wald ertönt von tausendstimmigem Leben,  
Tal aus, Tal ein ist Nebelstreif ergossen,  
Doch senkt sich Himmelsklarheit in die Tiefen,  
Und Zweig und Äste, frisch erquickt, entsprossen  
Dem duft'gen Abgrund, wo versenkt sie schliefen;  
Auch Farb' an Farbe klärt sich los vom Grunde,  
Wo Blum' und Blatt von Zitterperle triefen —  
Ein Paradies wird um mich her die Runde.

すでに世界は開かれて暁のひかりに輝き、／森はにぎやかな小鳥たちの声に満たされ、／谷を出で、谷に入って、霧の帯がたなびいている。／しかし、空の明るみはだんだん低いとこ

ろまで射してくる。／木々のしげる枝が、夜のあいだ身をひそめていた。／狭霧のこめる谷間から、目をさましたようにさわやかな姿をあらわす。／草葉や花が真珠のような白露をこぼす大地からは、／つぎつぎにあざやかな色どりが浮かびあがってくる。／おれのまわりに、まるで天国の円環がつくられてゆくかのようだ。(4686～4694)

多様な韻文形式が展開される。下降の趣きを与える妖精たちのトロヘウス詩行に対し、ファウストは上昇的のリズムを持つヤンブス三行連詩で答える。自然の力が彼に「最高の存在を目ざしてたゆみなく努力をつづける」(4685) 勇気を与えている。

第一部「森と洞」における自然は、ファウストに欲望の鎮静をはかることを、そして、「人間には何ひとつ全きものが与えられぬこと」(3240) を教えた。この場における自然はさらに「すでに世界は開かれ暁の光に輝いている」ことを告げている。「森と洞」の場における自然の作用を、より明確に表明したのだ。

1784年、ゲーテはワイマールにて着手した自然科学の研究を、論文「花崗岩について」<sup>9)</sup> において発表した。

In diesem Augenblicke, da die innern anziehenden und bewegenden Kräfte der Erde gleichsam unmittelbar auf mich wirken, da die Einflüsse des Himmels mich näher umschweben, werde ich zu höheren Betrachtungen der Natur hinaufgestimmt, und wie der Menscheng Geist alles belebt, so wird auch ein Gleichnis in mir rege, dessen Erhabenheit ich nicht widerstehen kann. So einsam sage ich zu mir selber, indem ich diesen ganz nackten Gipfel hinabsehe und kaum in der Ferne am Fuße ein geringwachsendes Moos erblicke, so einsam sage ich, wird es dem Menschen zu Mute, der nur den ältesten, ersten, tiefsten Gefühlen der Wahrheit seine Seele eröffnen will.

Ja, er kann zu sich sagen: Hier auf dem ältesten, ewigen Altare, der unmittelbar auf die Tiefe der Schöpfung gebaut ist, bring ich dem Wesen aller Wesen ein Opfer. Ich fühle die ersten, festesten Anfänge unsers Daseins, ich überschau die Welt, ihre schrofferen und gelinderen Täler und ihre fernen fruchtbaren Weiden, meine Seele wird über sich selbst und über alles erhaben und sehnt sich nach dem nähern Himmel.

大地の引力と活動する力が、いわば直接働きかけ、天の影響が私の身辺に漂う瞬間、私は自然のより高い観察へと高められる。そして、人間精神が万物を生气づけるようにと、ある比喩が私の胸に湧き上り、その崇高さに私は逆うことはできない。私はこの裸の頂上から下を見下

ろし、山裾にわずかに広がる苔を眺めながら、最古にして最初の、最も深い真理の感情に対してのみ自らの魂を開こうとする人間は、このように孤独であるといえる。——創造の深淵の上に建てられたこの最古の、永遠の祭壇の上で、私は全被造物の主に生贄を捧げる。私は我々の存在の最初の堅固な始源を感じ、世界を、その険しい溪谷やなだらかな谷を、その広い肥沃な草原を見渡し、私の心は自分自身と万物を越え、近い天を憧れるのだ。

彼は自然の中に神を体験する。自然——断章<sup>10)</sup>——におけるゲーテの考えは、自然の中には永遠の生命、生成、運動がある。それは、永遠に変化し、一瞬たりも静止することはない。そして、その法則は永劫不変である。——自然は人間を暗闇に包み込み、永遠に光を求めるよう人間を駆りたてる。自然は人間を地上に依存させ、重く不活発なものにさせておきながら、人間を奮い起こさせるものなのである。人間はすべて自然のただ中に生きていながら、自然のことは何も知らない。自然は絶えず我々に語りかけるが、その秘密を打ち明けることはしない。我々は常に自然に働きかけるが、それを支配する何らの力も持たない。ゲーテの自然観である。

Allein wie herrlich, diesem Sturm ersprießend,  
Wölbt sich des bunten Bogens Wechseldauer,  
Bald rein gezeichnet, bald in Luft zerfließend,  
Umher verbreitend duftig kühle Schauer.  
Der spiegelt ab das menschliche Bestreben.  
Ihm sinne nach, und du begreifst genauer:  
Am farbigen Abglanz haben wir das Leben.

しかし、さかんに飛沫をあげるその滝壺に、消えたりあらわれたりしながら、／七色の弧を描き出す虹の美しくさ。／くっきりとあざやかに描かれたと思うと、すぐまたうすれて空に散り、／ただまわりに一面の霧のようなすずしい雨を降らすのだ。／この虹は人間の努力をうつす影だ。／あれを見て考えたら、もっとよくわかるだろう。／しょせん人生は、あの色どられた影で捕らえるしかないのか。(4721～4727)

妖精たちの力でファウストは過去の罪から浄められている。世界は開かれ、ファウストは「生命の松明」に火をともしようとする。しかし、彼はその強烈な光に耐えることができない。ファウストはふたたびやわらかな朝霧の中に身を包もうと、目を大地にふせる。ゲーテはエッ

カーマンに、神と同じく太陽も至高なるものの啓示であり、しかも、我々地上の子らに認めることが許されている最も顕著な啓示なのである。と、述べた。あくまで啓示であり、直接認識することはできない。ファウストはもはや永遠の光を求めようとはしない、「色どられた影」に人生の意義を認めるのである。

1825年に論文にて<sup>11)</sup>、ゲーテは次のように述べる。

Das Wahre, mit dem Göttlichen identisch, läßt sich niemals von uns direkt erkennen, wir schauen es nur im Abglanz, im Beispiel, Symnol, in einzelnen und verwandten Erscheinungen.

真なるものは、神的なものと一致する。我々には決して直接認識されることはない。我々はそれをただ反映の中に、実例の中に、象徴の中に、個々の類縁の現象の中に見るにすぎない。

「霊の力と啓示によって、神秘の扉が開かれる」(378～379) と思い、満たされぬ知的衝動から、自ら神を認識しようとしたファウストは、変貌を遂げた。太陽から眼を背け、人間による認識の限界を知るのである。

ゲーテは次のように語っている<sup>12)</sup>。人間の到達し得る最高のものは、驚嘆である。それでもし根源現象 (Urphänomen) が驚嘆をひき起こすならば、人間は満足すべきである。それよりも高いものが人間に叶えられることはない。そして、人間はそれ以上のものを、その背後に求めてはならない。ここには限度がある。

## 5

グレートヒェンの悲劇は、ゲーテの青年期のものであり、時代はシュトルム・ウント・ドラング、本質的に非合理の時代であった。しかし、「ヘレナ」は五十才から八十才前後の成年期、老年期に書かれたものである。もはや、ヘレナはファウストにとって享楽の対象ではない。ヘレナは美そのものの象徴として登場する。また、ファウストの行動は衝動的なデモーニッシュな力で導かれることはない。「深く物事の真髄を洞察する達人だけが、無限なものに無限の信頼を寄せるのです」(6117～6118) という心境になっている。

第二部 第一幕「優雅な土地」における自然がファウストに第二の生をうみだしたように、美もまた神の創造の最高形態である。ファウストはまず美の体験をとらなければならない。

皇帝はファウストに、美の典型であるパリスとヘレナを見たいという。しかし、メフィストは古代ギリシャの美には何ら関心を示さない。悪魔のメフィストには、古典美の典型であるヘ

レナを呼び出す力はない。「異教徒だけは、さすがの私もどうにもなりません。おなじ地獄は地獄でも、まるでちがった国ですからね。」(6209～6211) メフィストはファウストに一つの方法を教える。「母たち」のもとへ行き、ヘレナの形態を借りればよいという。母たちの国は、「深い寂寥の底に神々しい女神たちが住んでいる」(6213)「空間もなければ、時間もない」(6214) 国、「永遠に空虚な広漠たる国」(6244) である。この「母たち」について、ゲーテ自身、「ギリシャの古代では、母たちが神として語られていた。」と述べた。ゲーテの自然哲学によれば、あらゆる生命の発生、その形態は、自然がその内部に有する「原型」(イデー)に基づいている。この原型に従ってすべてのものが生み出されるのである。ヘレナは美の原型である。それ故、ファウストは「母たち」の国へ行くのだ。

Nur umgekehrt. Du sendest mich ins Leere,  
Damit ich dort so Kunst als Kraft vermehre;  
Behandelst mich, daß ich, wie jene Katze,  
Dir die Kastanien aus den Gluten kratze.  
Nur immer zu! wir wollen es ergründen,  
In deinem Nichts hoff' ich das All zu finden.

君はおれに空虚の国へゆけという。／術と力をそこで増大しろという。／きみは火中の栗をつかむ猫の役を／おれにやらせようというのだ。／それならそれでいい。おれは一つその奥の奥を窮めてみよう。／きみのいう「虚無」の中に、おれは「万有」を見つかるつもりだ。(6251～6256)

「グレートヒェン悲劇」におけるファウストは、メフィストの言いなりに追従していた。しかし、その関係は除々に変化してくる。メフィストが無限の中に虚無のみを見るのに対し、ファウストはそこに「万有」をみようとするのである。

MEPH. Versinke denn! Ich könnt' auch sagen: steige!  
's ist einerlei. Entfliehe dem Entstandnen  
In der Gebilde losgebundne Reiche!  
Ergetze dich am längst nicht mehr Vorhandnen;  
Wie Wolkenzüge schlingt sich das Getreibe,  
Den Schlüssel schwinge, halte sie vom Leibe!

FAUST begeistert. Wohl! fest ihn fassend fühl' ich neue Stärke,  
Die Brust erweitert, hin zum großen Werke.

メフィスト では、沈んでおゆきなさい。いや、昇っておゆきなさいといってもいいのです。／結局は、同じことなのだから。あなたは生成した事物の世界を離れて、／形を持たぬ形の世界へゆくのです。／もはや存在しないものの形を求めにゆくのです。／ようようする群が、雲の去来のように絡みついてきます。／そしたら、その鍵をふるって、お避けなさい。ファウスト（感動して）よし、この鍵を手にはっきり握っていると、新しい力がわいてきた。／胸がふくらむ感じた。偉大な仕事のために出かけよう。(6275～6282)

ファウストは鍵を受けとり、「母たち」の国へと出発する。伝説にあるように、直接ヘレナ自身を連れてくるのではない。三本足の香炉を取ってくるのである。香炉の力で闇の国からヘレナを呼び出さねばならない。

「形を持たぬ形の世界へ」ファウストは、つまり原型（イデー）を把握するために出かける。

彼は「色彩論」<sup>14)</sup>において述べている。「我々が事物の本質を言い表わそうとするのは、ほんらい徒勞である。我々が知覚するのは種々の作用であり、もしこれらの作用を全部記述すれば、その事物の本質をどうにか包括することになるであろう。我々がある人物の性格を叙述しようとしても、むだな努力をするだけである。これに対し、彼のいろいろな行為や活動を寄せ集めてみると、その性格のイメージが浮かび上ってくるのであろう。」

「しかし、ある物事を単に眺めるだけでは、我々は促進されることはない。あらゆる熟視は考察へ、あらゆる思念は結合へと移行し、それ故、我々は対象世界を注意深く眺めるだけですでに理論化しているといえるのである。」

芸術家が物事を見るということは、表面的効果を見るのではない。また、単に想像力に訴えるようなものを見るのでもない。確固として純粋なもの、不変なものを見るのである。ゲーテによれば、熟視は考察へ移行する。つまり、熟視するということは、それ自身理論化することを意味する。そして、そのためには、イデーを造形することが要求されるのである。「熟視」が「理論」を「理論」が「イデー」に通じる。

「母たち」の国はイデーの世界である。「鍵」もまた一つの象徴である。神秘につつまれたイデーの世界の扉を開く「鍵」でもあるのだ。

FAUST. Hab' ich noch Augen? Zeigt sich tief im Sinn  
Der Schönheit Quelle reichlichstens ergossen?  
Mein Schreckengang bringt seligsten Gewinn.  
Wie war die Welt mir nichtig, unerschlossen!  
Was ist sie nun seit meiner Priesterschaft?  
Erst wünschenswert, gegründet, dauerhaft!

ファウスト おれの目はあるのだろうか。美の泉が豊かに湧いて、／じかに心に深くしみこむみたいだ。／恐ろしい母たちの国への旅が、この世にもありがたい獲物をもたらしてくれたのだ。／世界は今日まで、何とつまらぬ閉ざされた世界であったことだろう。／おれが司祭になってヘレナを呼び出したら、急に世界は一変してしまった。初めて世界が望ましいもの、堅固なもの、永続するものに変貌した。(6487~6492)

「母たち」の国は空間もなければ、時間もない世界である。この場に登場するのは、あくまで「イデー」としてのヘレナである。「美は秘密の自然法則」の現われである。ゲーテは自らの古典主義理論を論じた論文「ヴィンケルマン」<sup>15)</sup>において、自然の最高の産物としての「美しい人間」を賛美した。また、ゲーテとともに、ドイツ古典主義文学を完成したシラーは、感覚的人間を理性的ならしめるには、その人間をその前に美的にならしめること。これが教養の最も重要な任務の一つである。なぜなら、ただ美的状態からのみ道德的状态は発展しうるのである。との認識にたつ。

それ故、「最高の存在を目ざしてたゆみなく努力をつづける」(4685) ファウストにとってヘレナとの美の体験が必要欠くべからざるものとなったのである。

ゲーテは友人ヨハン・カスパー・ラーヴァターに、次のように語っている。

「私の存在のピラミッドは既にその基礎ができている。これをできる限り高く空中へそびえ立たせようという願望は、他のすべてに優先し、殆ど瞬時の忘却をも許さない。ぐずぐずしてはおれない。私はかなり年をとっているの、運命が私を途中で坐折させるかも知れぬ。そして、バベルの塔は尖塔もなく未完成で残ることになる。その時には、少なくとも彼は勇気を持って計画したといってもらいたい。もし私に生命があるなら、神意により、力の及ぶ限り上部に達するようにしたいと思っている」<sup>16)</sup>

グレートヒェンからヘレナへ、シュトルム・ウント・ドラングの非合理的感情の世界から、

古典的「イデー」の世界へ、暗闇の衝動に憑かれた一個人の「小世界」から、広大で平静な「大世界」へとファウストの魂は導かれるのである。

### 註

- 1) Eckermann Gespräche mit Goethe S. 344  
Donnerstag den 17. Februar 1831 S. 356
- 2) Eckermann Gespräche mit Goethe Mittwoch den 2. März 1831
- 3) Dichtung und Wahrheit Vierter Teil 20. Buch S. 175
- 4) Dichtung und Wahrheit Vierter Teil 20. Buch S. 175, 176
- 5) Eckermann Gespräche mit Goethe Mittwoch den 2. März 1831 S. 356  
Dienstag den 8. März 1831 S. 358
- 6) Eckermann Gespräche mit Goethe Donnerstag den 17. Februar 1831
- 7) E. Staiger Goethe Band S. 275
- 8) 「ゲーテとの対話」第四部のための草稿より 岩波書店
- 9) Über den Granit Goethe Werke 12 Aufbau Verlag S. 141
- 10) Die Natur Fragment Goethe Werke 12 Aufbau Verlag S. 7
- 11) Versuch einer Witterungslehre 1825 Aufbau Verlag S. 192
- 12) Eckermann Gespräche mit Goethe Mittwoch den 18. Februar 1829 S. 244
- 13) Eckermann Gespräche mit Goethe Sonntag den 10. Januar 1830 S. 293
- 14) Farbenlehre
- 15) Winckelmann Schönheit Aufbau Verlag Goethe Werke 11 S. 265
- 16) An Lavater Ostheim vor der Rhön etwa 20. September 1780 S. 324

### Literatur

Goethes Werke Hamburger Ausgabe in 14 Bänden Verlag C.H. Beck  
 Goethes Werke Aufbau-Verlag Berlin und Weimar 1968  
 Goethes Briefe Christian Wegner Verlag  
 Gespräche mit Goethe F.A. BROCKHAUS WIESBADEN  
 Friedrich-Scheithauer: Kommentar zu Goethes Faust PHILIPP RECLAN  
 Fritz Martini: Deutsche Literaturgeschichte Alfred Kröner Verlag  
 Reinhard Buchwald: Faust Führer Alfred Kröner Verlag  
 Emil Staiger: Goethe Atlantis Verlag  
 Klassik Erläuterungen zur deutsche Literatur Volkseigener Verlag  
 ゲーテ全集 潮出版社  
 ゲーテ全集 人文書院 ファウスト 大山定一訳  
 ファウスト論集 大畑末吉著 早稲田大学出版部  
 ゲーテ研究 木村直司著 南窓社